

とある問題児の母も来るそうですよ？

地獄花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

母はこれから生れてくるであろう我が子を見て微笑んだ

「これで、この子は幸せになれる」

そう信じて疑わなかった

だが現実残酷で非常であった、とある事が発覚してしまった

それを知った母は悲しみ嘆きそして長い眠りについた…

目次

設定	1
第一話	4
第二話	8
第三話	12
第四話	17
第五話	23

設定

設定

名前：彼岸朔夜（ひがんさくや）

箱庭に来た時には柊碧郁（ひいらぎあおい）と名乗る。 *名
字が違う理由は本編にて。

容姿：青空のような髪色に太陽と月のような瞳を持つオッドアイ。
髪はかなり長いサラサラで結ってはいない。瞳には光が無いが両
目の視力はかなり良い。お風呂上がりには飛ばされた為服は大きめの
ワイシャツだけだったが十六夜から学ランの上着を羽織らされてい
る。

本来の容姿では夜空のような髪色に星とルビーのような瞳を持つ
オッドアイ。髪型も瞳の虹彩も同じでこの二つは変えられなかった。

とある問題児の母だがそれを隠している。その為名乗る際にも本
名を名乗らず容姿も変えており本来の見た目ではない。中世的な顔
立ちで性別が判別出来ず、身長が低い。だが不思議と子供には見えな
いのだとか。

身長が低い理由は本人曰く「発達障害」との事だが理由は別にある。
常に1歩離れた所において必要以上に近づけさせようとせずコミュ
ニティに入ったのも「あの子がいるから」という理由らしい。その「あ
の子」が誰なのかは頑なに話そうとしない。ギフトカードには何の文
字も書いておらず力があるのかどうか不明である。唯一書かれてい
るものは聖母マリアの絵のみ。

*本編の進み具合により増減あり

どうして!?どうしてなの:!!

あの子の為にと思つて絶えてきたのに……、何故そんな酷いことが出来るの!

……許さない、絶対に許さないから!!

ごめんなさい、ごめんなさい……××

知らなかったじゃ済まされないよね×

よく聞いて?知り合いにとってもいい人がいる、今日からその人のお世話になりなさい

大丈夫、貴方は強い子だから

さあ、もうお行きなさい

私?私についていけないの……、せめて貴方が壊れてしまわない様に守つてあげるから

泣かないで、きつとまた会える

だからその日まで頑張りなさい、××

貴方の幸せを誰よりも願っているから×

側で成長を見られないのが心残りだけど……、そうも言つてられない事態がおこっているから

最悪の事態を防ぐ為にも、こうするしかない……

嗚呼、止められなくてごめんなさい

側に居ることが出来なくてごめんなさい

貴方は生きて、幸せになりなさい

それだけが願い、唯一の願い

お願い、聞いてくれる?叶えてくれる?

……そう、いい子だね。

さよなら、××

出来ることなら、貴方と共に居たかった
普通に生きてみたかった
普通に生んであげられなくてごめんね……

——第一話——

「ふあ…、早く寝ないといけないよね……」

欠伸を噛み殺しながら髪の水気を取る。

お風呂や食事なんかもしなくていいのだがたまにこうしないと歩き方や食べ方を忘れてしまいそうなのでこうして2日か3日に1度のペースで自ら体を清め食事をしている。

服をきちんと着てもいいのだが寝るだけだし外に出ることもないので良しとする。

「あれ、手紙？可笑しいな、この部屋は地下にあるのに」

そう、今いる場所は地下3階にあり手紙が届く筈がない場所なのだ。

『普通はありえない』ことだ。それにこの場所を知っている人もいないはず、誰にも教えていないのだから。

さてどうしたものか、この手紙を開けるべきだと直感が告げている。

今はもう会うことが出来なくなった我が子に会える、そんな気がしてならないからだ。

それならばと髪と瞳の色を変える、今の自分に出来るのはこの位だ。声は…きつと何とかなるだろう。

荷物の準備は必要ないしこのまま手紙を開けよう。

そう思い手紙を手に取り封を切り内容を確認する。

『 悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能ギフトを試すことを望むのならば、己の家族を友人を財産を世界の全てを捨て我らの“箱庭”に来られたし 』

「随分と身勝手な……」

ぽつりと呟いた頃には強い風を感じ辺りを見渡せばそこは完全な異世界だった。

どうやら自分以外にも三人いてその中に我が子もいるようだ、こうしてまた一目見ることが出来尚且つ会うことも出来るなんてなんて幸福なんだろう。

例え母だと告げられないとしても、こうして会うことが出来ただけでも幸せだ。

余計なお世話かもしれないが多少なりとも怪我をすることになりそうだと思っただが減速して行くのを感じ下の池を視界に入れば濡れるだけで済みそうだと体の力を抜いた。

その瞬間に四つの大きな水柱があがる。

水膜で勢いが衰えていたため4人は無事で済んだがノースリーブの少女と共に落ちてきた三毛猫は違うらしい。

「……………大丈夫？」

『し、死ぬがぼとおもった……！』

まだ呂律が回らない三毛猫だが、彼(?)の無事を確認した少女はホッと胸を撫で下ろす。

その一方で、学ランの少年とリボンの少女はさっさと陸地に上がりながら、それぞれが罵詈雑言を吐き捨てていた。

そろそろ池からでようと自分も陸地に上がる、面倒なので服は絞らない。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺り込んだ挙げ句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだ

ぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「……………いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう?」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

ふん、と金髪の少年と黒髪の少女は互いに鼻を鳴らして服の端を絞る。

「此処……………どこだろう?」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか?」

ノースリーブの少女の眩きに学ランの少年が応える。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が?」

「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱き抱えている貴女は?」

久遠飛鳥と名乗った黒髪に二つの大きな赤いリボンをつけている、ドレスを着た少女が高飛車な物言いです返す。

「……………春日部耀。以下同文」

春日部耀と名乗った茶髪に白のヘアピンをつけている、スリーブレ

スのジャケットとショートパンツを着た少女が物静かに返す。

「その髪の毛の長い貴方は?というか上着くらい羽織りなさい!」

注意されてしまった、異性がいるというのにこんな格好をしていて水に濡れてしまったせいで透けているからだろう。だが何も持ってきていないのでどうにも出来ない。

「これでも羽織つとけ、言つとくけどちゃんと返せよ?」

そう言い着ていた学ランの上着を羽織らせてくれた。

自己紹介とお礼を述べなければと自分も口を開く。

「その少年、上着をありがとう。こんな格好なのはお風呂上がりだったからだ、ごめんよ。僕は柊碧郁、よろしく頼むよ」

一応無難な自己紹介をしたから大丈夫だろう。

さて、そろそろ茂みに隠れている少女にご登場願おうかな?説明も受けなければならぬことだし、ね。

——第二話——

「じゃあ最後に、野蛮で狂暴そうなのその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとうよ。見たまんまに野蛮で狂暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃ったダメ人間なので、用法と用料を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様？」

「取り扱い説明書をくれたら考えてあげてもいいわ。十六夜君」

「ハハ、まじかよ。今度作ってやるから覚悟しとけ」

心からケラケラと笑う逆廻十六夜

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥

我関せず無関心を装う春日部耀

自分の服と上着を乾かす柊碧郁

そんな彼らを物陰から見ている黒ウサギは

（うわあ………なんか問題児ばっか見たいですわ）

召喚しておいてアレだが……彼らが協力する姿は、客観的に想像できそうにない。黒ウサギは陰鬱そうに重たくため息を吐くのだった。

十六夜は苛立たしげに言う。

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……………。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

(全くです)

黒ウサギはこっそりツツコミを入れた。

もっとパニックになってくれれば飛びだしやすいのだが、場が落ち着き過ぎているのでタイミングを計れないのだ。

(まあ、悩んでいても仕方ないデス。これ以上不満が噴出する前にお腹を括りますか)

三者三様の罵倒雑言を浴びせてくる様を見ると怖気づきそうになるが、此処は我慢である。

ふと十六夜がため息混じりに呟く。

「——仕方がねえな。こうなったらそこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

物陰に隠れていた黒ウサギは心臓を掴まれたように跳び跳ねた。

四人の視線が黒ウサギに集まる。

「なんだ。貴方も気づいてたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そちの猫を抱いてる奴と俺の上着を羽織ってる奴も気づいてたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「落ちてる時に見えたり耳が隠しきれてない、かな」

「……………へえ？面白いなお前」

軽薄そうに笑う十六夜の目は笑っていない。3人は理不尽な招集を受けた腹いせに殺気の籠もった冷ややかな視線を黒ウサギに向ける。黒ウサギはやや怯んだ。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「嫌だ」

「あっは、取りつくシマもないですね♪」

バンザイー、と降参のポーズをとる黒ウサギ。

しかしその眼は冷静に四人を値踏みしていた。

(肝っ玉は及第点、この状況でNOと言える勝ち気は買いです。まあ、扱いにくいのは難点ですけども)

黒ウサギはおどけつつも、四人にどう接するべきか冷静に考えを張り巡らせている――

と、春日部耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから驚掴み、

「えい」

「フギヤァ！」

力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよつとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります！」

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

今度は十六夜が右から引っ張る。

「……………じゃあ私も」

「ちよ、ちよつと待——！」

今度は飛鳥が左から。左右に力いっぱい引っ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

——第三話——

「——あ、あり得ない。あり得ないのでですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス」

「いいからさっさと進めろ」

半ば本気の涙を瞳に浮かばせながらも、黒ウサギは話を聞いて貰える状況を作ること成功した。四人は黒ウサギの前の岸边に座り込み、彼女の話を『聞くだけ聞こう』という程度には耳を傾けている。

黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて、

「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！

ようこそ！『箱庭の世界』へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただけようかと召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気づいていらつしやるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその『恩恵』を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問をするた

めに挙手をした。

「まずは初歩的な質問からしていい？ 貴方の言う、 “我々” とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある “コミュニティ” に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「属していただきます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの “主催者” が提示した賞品をゲットできるといってもシンプルな構造となっております。」

「………… “主催者” って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが、 “主催者” が修羅神仏だけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。 “主催者” 次第ですが、新たな “恩恵” を手にすることも夢ではありません。」

後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらはすべて “主催者” のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者は結構俗物ね………… チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……………そしてギフ

トを掛けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑む事も可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず」

黒ウサギは愛嬌たっぷりの笑顔に黒い影を見せる。

挑発ともとれるその笑顔に、同じく挑発的な声音で飛鳥はが問う。

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらってもいいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内き登録していただければOK！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったら参加していつてくださいな」

飛鳥は黒ウサギの発言に片眉をピクリとあげる。

「…………つまり、『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えるてもいいのかしら？」

お？と驚く黒ウサギ

「ふふん？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもってのほか！そんな不逞な輩には悉く処罰します——が、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭におかれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手に

することも可能だということですね。」

「そう。中々野蛮ね」

「ごもつとも。しかし、〃主催者〃は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニケーションでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

「待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

静聴していた十六夜が威圧的な声を上げ立つ。ずっと刻まれていた軽薄な笑顔が無くなっていることに気がついた黒ウサギは、構えるように聞き返した。

「……………どういった質問です？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かってルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは……………たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見まわし、巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。

彼は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は……面白いか？」

」

他の三人も無言で返事を待つ。

彼らを読んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

それに見合うだけの催し物があるかどうかこそ、四人にとって一番重要な事だった。

「——YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

第四話

——場所は箱庭二二〇五三八〇外門

「ジン〜ジン〜ジン！黒ウサのお姉ちゃんまだ箱庭に戻ってこないの〜？」

「もう二時間近く待ちぼうけでわたし疲れたー」

口々に不満を吐き出す友人たちに苦笑しながら

「……そうだね。皆は先に帰っていいよ、僕は新しい仲間を待っているから。」

ダボダボのローブに跳ねた髪が特徴てきな少年

——ジンと呼ばれた少年は取り巻きの子供たちに帰るように促す

「じゃあ先に帰るぞー。ジンもリーダーで大変だろうけど、頑張つてなー」

「もう、帰っていいなら早く言ってよ！わたしの足なんてもう棒みたんだよー！」

「おなかへったー。ご飯先食べていい？」

「うん、僕等の帰りが遅くても夜更かししたら駄目だよ？」

ワイワイ騒ぎながら帰路につく少年たちと別れる。ジンは石造りの階段に座り込むと、暇を持て余したのか、外門を通る人々をぼんや

りと眺めていた。

(箱庭の外に作られた国が最近活発になってきたって聞いたけど、ペリベッド通りは「世界の果て」と向かい合っているから閑散としているなあ……………)

箱庭の世界に於ける「国」の定義とは、超巨大コミュニティの俗称である。明確な「世界の果て」が存在する箱庭の世界だが、その表面積は恒星に匹敵するとまで云われている。それだけ膨大な資源と豊かな土地が野晒しにされていて開拓しない手はない。才ある者は人を集めて国を作り、逆に能ない者は天幕に覆われた箱庭都市から離れて暮らしを始める者も多い。

龍種、鬼種、幻獣、精霊などの国は箱庭外にも大規模の都市を設けている。ギフトを失った人間は箱庭から一步離れた国で力を付け、再度箱庭で『ギフトゲーム』に参戦するのだ。

(もしも外界から来た人達が使えない人達だったら……………僕らも箱庭を捨てて外に移住するしかないのかな)

ジンは新たな同士に期待を込めて想いを馳せる。力の無いコミュニティはゲームホストになって主催をすることも出来なければ、ゲームに参加してクリアすることも出来ないからだ。

集団を維持出来ない程の衰退。それは即ち、コミュニティの消滅を意味する。

ジンのコミュニティは現在、とある事情で黒ウサギを除きジンよりも幼い者達ばかりだ。そんな彼らが生まれ育った土地を手放し、宛ての無い旅をするのは何としても避けたい。

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れて来ましたよー！」

ジンは、ハツと顔を上げると、外門前の街道から黒ウサギと女性三人が歩いて来た。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性二人が？」

「はいな、此方の御四人様が——」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。
カチン、と固まる黒ウサギ。

「……………え、あれ？もう二人いませんでしたっけ？ちよつと目付きが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方と無口な子供のような見た目をしているのに何処か大人っぽいミスティアスな方が」

「ああ、十六夜君達のこと？彼等なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』と言って駆け出して行つたわ。あつちの方に」

そう言つて飛鳥は上空4000メートルから見た断崖絶壁を指差す。

街道の真ん中で呆然となった黒ウサギは、ウサ耳を逆立てて問います。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

「『止めてくれるなよ』と言われたもの」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!？」

「『黒ウサギには言うなよ』と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です！実は面倒臭かつただけでしょう御二人さん！」

「うん」

ガクリ、と前のめりに倒れる黒ウサギ。新たな人材に胸を躍らせていた数時間前の自分が妬ましい。

まさかこんな問題児ばかり掴まされるなんて嫌がらせにも程がある。

そんな黒ウサギとは対照的に、ジンは蒼白になって叫んだ。

「た、大変です！ “世界の果て” にはギフトゲームのために野放しにされている幻獣が」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に “世界の果て” 付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？………斬新？」

「冗談を言っている場合じゃありません！」

ジンは必死に事の重大さを訴えるが、飛鳥と耀は叱られても肩を竦めるだけである。

黒ウサギは溜め息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ………ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに—— “箱庭の貴族” と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

驚きから一転、怒りのオーラを全身から噴出させ黒ウサギは艶のある青い髪を淡い緋色に染めていく。

外門めがけて空中高く跳び上がった黒ウサギは外門の脇にあった彫像を次々と駆け上がり、外門の柱に水平に張り付くと、

「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

黒ウサギは淡い緋色の髪を戦慄かせ踏み締めた門柱に亀裂を入れる。全力で跳躍した黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あっという間に二人の視界から消え去っていった。

巻き上がる風から髪の毛を庇うように押さえていた飛鳥が呟く。

「……………箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが……………」

そう、と空返事をした飛鳥は心配そうにしているジンに向き直り、

「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださいるのかしら？」

「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願ひします」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀。」

ジンが礼儀正しく自己紹介する。飛鳥と耀はそれに倣って一礼した。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥はジンの手を取ると、胸を躍らせるような笑顔で箱庭の外門を潜るのだった。

第五話

「なあチビ、一緒に世界の果てに行かねえか？」

「うーん…、楽しそうだし行こうかな？」

「ヤハハ！そう来なくっちゃな！」

そう言い僕を抱えると第三宇宙速度で駆け出す。

おお、かなり早い。というか今更だが黒ウサギに何も言わなかったけど大丈夫なのだろうか？

いや…きつと、気にしたら負けというやつだ。気にしないようにしよう。そう思いつつ身を委ねていると視界が開けてくる。

「これは中々……」

思わずそう呟く位には素晴らしい景色だった。だが此処は世界の果てではないようだ。

おや？誰かの別の気配がするような……？

『人間、試練を選べ』

「選べ、だあ？テメエが試せるか俺が試してやるよ……！」

『舐めるなあ!!』

大きい蛇…？いや、蛇神かな。

というかあの蛇神見る目がないなあ……、人間だからって自分に適うはずがないと思ってるのかな。

あ、殴られて吹き飛ばされてる。弱すぎないかな？あれでも一応神なの……？あまりの弱さに驚いてしまう。

「おい、手を出すなよ？」

「わかってるよ、それにもうギフトゲーム始まってる」

始まってしまえば手を出すことなど不可能だろうと思いつつも断言する。

「この辺りのはず……………」

「あれ、お前黒ウサギか？どうしたんだその髪の色」

ついに黒ウサギに見つかってしまった。というより髪の色は赤じゃなかったような……？記憶間違いとか見間違いとかそんなんじゃないはず……、ということは何かしらの条件を満たすと髪の色が変わるのかな？

「もう、一体何処まで来ているんですか!？」

「=世界の果て=」

やっぱり怒られた、分かっていたけれど。

「しかしいい脚だな。遊んでいたとはいえこんな短時間で俺に追いつけるとは思わなかった」

「むっ、当然です。黒ウサギは『箱庭の貴族』と謳われる優秀な貴種です。その黒ウサギが」

アレ?と黒ウサギが首を傾げる。

「ま、まあ、それはともかく!十六夜さんと碧郁さんが無事で良かったデス。水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」

「水神?——ああ、アレのことか?」

「もう手遅れだよ?」

え?と黒ウサギは硬直する。

何せ二人の指差す先にあるのは、川面にうつすらと浮かぶ白くて長いモノだ。黒ウサギが理解する前にその巨体は鎌首を起こし、

『まだ……まだ終わっていないぞ、小僧オ!!』

二人指を差しているそれは——身の丈三十尺強はある巨軀の大蛇。それが何者か問う必要はないだろう。間違いなくこの一帯を仕切る水神の眷属だ。

「蛇神……って、どうやったらこんなに怒られるんですか十六夜さん!」

ケラケラと笑う十六夜は事の顛末を話す。

「なんか偉そうに『試練を選べ』とかなんとか、上から目線で素敵なこと言ってくれたからよ。俺を試せるのかどうか試させてもらったのさ。結果はまあ、残念な奴だったが」

「貴様……付け上がるな人間!我がこの程度で倒れるか!!」

蛇神の甲高い咆哮が響き、牙と瞳を光らせる。巻き上がる風が水柱

を上げて立ち昇る。

「十六夜さん、下がって！」

黒ウサギは庇おうとするが、十六夜の鋭い視線はそれを阻む。

「何を言ってるやがる。下がるのはテメエだろうが黒ウサギ。これは俺が売って、奴が買った喧嘩だ。手を出せばお前から潰すぞ」

本気の殺気が籠った声音だった。黒ウサギも始まってしまったゲームには手出しできないと気づいて歯噛みする。

十六夜の言葉に蛇神は息を荒くし応える。

「心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる」

「寝言は寝て言え。喧嘩は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

求めるまでも無く、勝者は既に決まっている。

その傲慢極まりない台詞に黒ウサギも蛇神も呆れて閉口した。

「フン——その戯言が貴様の最後だ！」

蛇神の雄叫びに応えて嵐のように川の水が巻き上がる。

竜巻のように渦を巻いた水柱は蛇神の丈を遥かに高く舞い上がり、何百トンもの水を吸い上げる。

竜巻く水柱は計三本。それぞれが生き物のように唸り、蛇のように襲いかかる。

この力こそ時に嵐を呼び、時に生態系さえ崩す、「神格」のギフトを持つ者の力だった。

「十六夜さん！」

黒ウサギが叫ぶ。しかしもう遅い。

竜巻く水柱は川辺を抉り、木々を捻じ切り、十六夜の体を激流に飲み込む――！

「――ハッ――しゃらくせえ!!」

突如発生した、嵐を超える暴力の渦。

十六夜は竜巻く激流の中、ただ腕の一振りでも風を薙ぎ払ったのだ。

「嘘!？」

「馬鹿な!？」

驚愕する二つの声。それはもはや人智を遥かに超越した力である。蛇神は全霊の一撃を弾かれ放心するが、十六夜はそれを見逃さなかった。獰猛な笑いと共に着地した十六夜は、

「ま、中々だったぜオマエ」

大地を踏み砕くような爆音。胸元に飛び込んだ十六夜の蹴りは蛇神の胴体を打ち、蛇神の巨軀は空中に高く打ち上げられて川に落下した。その衝撃で川が氾濫し、水で森が浸水する。

また全身を濡らした十六夜はバツが悪そうに川辺に戻った。

「くそ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代ぐらいは出るんだよな黒ウサギ」

冗談めかした十六夜の声は黒ウサギに届かない。

どうやら放心しているようだ、というより考え事の方が近いかな
……？

「十六夜、僕は寝る。聞きたいことがあるんでしよう？興味ないから聞く気は無いけど……。飽きたらすぐにやめるから何処に行っても同じだし。というわけでおやすみ」

それに十六夜には服を貸してくれた礼がある、だからとりあえずは十六夜に恩返しをしないとイケないため同じ所に入るつもりだ。手伝うかどうかも気分次第、ということにしておこう。

自分の中で意見がまとまればそのまま眠ってしまった、置いていかれたらどうしようとも思ったが誰かが運んでくれるだろうと深く考えるのをやめた。